さくらんぼがり　４

さくらんぼがり　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19946252

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 濁点喘ぎ, テル霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回はテル霊です。濁点喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

さくらんぼがり　4

空っぽの芹沢の席を見て、霊幻はため息をついた。
茂夫が来る予定なのはだいぶ先だが、どうせ今日も来ないだろう。
エクボも、たぶん、来ない。

覚悟してのことだった。

うっかり茂夫と寝た時点で、霊幻は『いつもの相談所』を半ば諦めざるを得なかった。
何事にかえても、茂夫たちを守るために。
まず、茂夫を特別枠に置く訳にはいかなかった。
相談所の中で茂夫だけが肉体関係がある。その状態だと、仲がかなり良い相談所メンバー達が霊幻と茂夫をくっつけようとしてくる可能性が高かった。

（俺がどれだけクズかも知らないで）

霊幻は茂夫に電話をかける。出ない。

師匠として、霊幻は人生の１番大事な席の１つに茂夫を座らせている。
可愛い弟子の？下手をすると生涯の伴侶に？自分が？
――冗談だろ。
師として許しがたかったし、そもそも恋愛感情が無い。
霊幻は色んな人間と関係を持っているうちに、恋愛とは何かよく分からなくなっていた。

霊幻は芹沢に電話をかける。出ない。

だからある意味、茂夫と付き合ってやっても良かった。そうチラッと思った自分が霊幻は恐ろしかった。

──まずい。外堀を埋められるとモブと付き合うことになってしまう。
可愛い弟子が幸せそうな顔をすれば、まんざらでも無くなるだろう自分が怖くて、霊幻は短慮になった。
茂夫を特別枠から外すのだ。爛れてる？何を今更。
そう思いながら、手ごろなエクボに声を掛けた。
もっと手こずると思っていたが、エクボは霊幻が思っていたよりあっさり誘いに乗ってきた。エクボも茂夫に霊幻を諦めるきっかけを与えてやりたかったのだろう。その誰よりも茂夫を大事にしている上級悪霊と思惑が一致していることに安堵しつつも、霊幻は『これでモブとはお別れだな』とチリッと胸を痛めていた。

霊幻は携帯を開く。

芹沢のことは全くの予想外だが、断っても許しても結果は同じだ、と思うと霊幻はめんどくさくなってしまった。断った方が執着されてしまうかもしれない。ヤれなかった後悔よりヤった後悔の方がいいだろう。そうして霊幻は芹沢に身体を許して、そして芹沢という部下を失った。と思っている。

相談所はめちゃくちゃだ。だがそれでいい、と霊幻は思っていた。
（俺を性的にいいものだと勘違いするよりは、嫌われた方がいい）
「出てくれっかな」
とはいえ予約は埋まっている。本物案件が来た時に対応してくれる誰かしかが必要だった。

霊幻は花沢に電話をかける。

※

一方、茂夫は。
ぐちゃぐちゃになった感情をどうにもできないまま、なんとか日常生活を送っていた。
霊幻からの着信にビクッとする。最初に気まずさが、次に嬉しさ

が、そして最後に嫌悪感が残って、霊幻からの電話に出れなかった。
困ってるんだろう、と思う。エクボだけでなく、芹沢とも寝たと聞いた。そんなことをすれば相談所には誰も居なくなる。困って茂夫に電話してきているのだ。
どの面下げて、と思う自分と、これは仕事の話で、プライベートとは関係ないのだ、と言う大人な自分が茂夫の中にいる。
いやでも。あんなことをしておいて。
茂夫は霊幻を軽蔑した。嫌いになった。と、思う。
ならば、何故。
電話に出て、「もう行きませんから」と言わないのか。
その答えが出せなくて、茂夫は苦しんでいた。
「師匠はひどい」
ひどくて汚い大人だった。幻滅した。
でも。
茂夫が思い出すのは、霊幻の体温と、甘い一夜の記憶ばかりなのだ。
「……っ」
抱くんじゃなかった、と茂夫は何度も後悔する。
呪いのように、霊幻の痴態が茂夫の脳裏に張り付いて離れてくれなかった。
そうやって憎しみと思い出が、茂夫の中を嵐のように暴れ回っていた。

※

「こんにちは、霊幻さん」
「うぉっ」
成人してイケメンっぷりが爆発してる花沢のまぶしさに、思わず霊幻は顔を覆う。
「なんですかそれ」
「いや、破壊力がすごくて……なんでもない。来てくれてありがとう。助かる」

くすっと花沢は意味深に笑う。
「滅茶苦茶やりましたね？話は聞いてますよ」
「うっ」
「まあ、どうせなら処女の子がいいと言う気持ちは分からなくはないですけど、余りにも身近な所で遊ぶのはやめた方がいいと思いますよ」
はは、と引き攣った笑いを霊幻は浮かべる。
「ま、まあ、モブの席使ってくれ」
花沢の目が見開かれる。
「……いいんですか？」
「いいよ、多分あいつもう来ねーもん」
花沢は噛み締めるようにほくそ笑む。
「じゃあ、失礼して」
そうして茂夫の場所に花沢は座り込んだ。
「いやー、それにしても来てくれて助かったよ。もう知り合い関係は全滅かと思ってた」
「まあ、僕も人のこと言えませんから」
「……そうなんだ？」
「ええ。……お互い探られたく無い腹を探るのはやめましょうよ」
それもそうだな、と霊幻は仕事の話に切り替える。
花沢は熱心に聴き、詳細を確認してきた。
スムーズに除霊は進み、あっという間に終業時間になった。
「これからは毎日来ますね。困ってるんでしょう？」
「お、いいの？助かるわー」
「……いえいえ」
花沢はほくそ笑んでもはや自分のものとなった机を撫でる。
「自分のマグカップとか持ってきてもいいですか？」
「もちろん構わねえよ。大学の課題とかも持ってきて空き時間にはやってていいからな」
「……はい」
花沢は嬉しさを噛み締める。
県外の大学に行かなかったかいがあった、と。
「じゃあ今日はもう上がってくれていいから……ん……」

霊幻の携帯が震える。
ぱかりと開いて確認したメールが、霊幻の顔を緩ませたのを花沢は見逃さなかった。
「何のメールです？」
「ん……何でもねえよ」
「気になるなあ」
ひょい、と花沢は霊幻から携帯を超能力で取り上げた。
「あっ、こらっ、やめなさいっ」
「『新隆、童貞捨てたいって言ってるコいるんだけど、今夜どう？』……ふーん、こうやって男漁りしてるんですね」
「……そうだよ」
諦めたように霊幻はため息をつく。茂夫なら絶対しないだろうイタズラに対応が後手後手になってしまっていた。
「ほら、携帯返しなさい」
「ええ」
ツカツカと歩み寄って。
「はい」
差し出した霊幻の手をぐいと引っ張って、花沢はその唇を奪った。
「ん゛っ」
霊幻は押し除けようとしたが、もはや自分より体格が良くなってる上に、超能力をためらいなく使ってくる花沢は、びくともしなかった。
「ん、んぁ、ッン、ん、ん……」
じん、と後頭部がしびれて、

あ、ヤバい

と霊幻は花沢の舌を噛もうとした。
「おっと」
不穏な動きを察知して花沢が身体を離す。
「勝手にキスしてんじゃねーよ。性暴力で警察に突き出すぞ」
「突き出せるんですか？可愛い僕を？」
こてん、と小首を傾げられて、霊幻は言葉に詰まる。

花沢は良く霊幻の弱味を理解していた。
──何しろ、ずっと遠くから見つめていたのだから。
「〰〰〰〰っ、２度とするなよ！」
「嫌ですけど」
悪戯に花沢の目が細められる。
「ねぇ霊幻さん、今夜は僕と遊びませんか」
「嫌だ」
霊幻は身をよじった。花沢が手首を掴むのを外せない。超能力を使って固定しているからだろう。
「……お前まで来なくなると困るんだよ」
「僕はちゃんと明日も来ますよ」
「どーだか」
ヤると豹変する男を霊幻はゴマンと知っている。
ヤる前は童貞捨てるだけ、と言っていたのに、いざ一度ヤったら惜しくなるのか、付き合う付き合わないだの、セフレになるならないなどでモメるのだ。
赤の他人ならいい。でも花沢と揉めるのは困るのだ。
「僕も遊び慣れてるんで、どうのこうの言ったりしませんよ。童貞にしか興味無いんでしょう？付き合えとか言ったりしません。ドライに行きましょうよ、お互い」
「こんなオッサンに迫ってる時点で、ドライな感じしないんだけど」
花沢も自分に気があるのでは？と霊幻は疑っている。性欲だけならいい。だがそこに気持ちが絡んでくると厄介なのだ。
「……それとも、僕とやるのが嫌なんですか？」
す、と能面のような顔になった花沢に霊幻はひゅっと喉を鳴らす。
イケメンの真顔は凄味が怖い。
「そ、れは」
「影山君はいいのに、僕はダメなんですか」
「そ、の訊き方は、ずるい」
霊幻の意思が揺らぐ。
「いいよ。テルくんならいいと思ってるよ。俺にとっちゃ大事な年下の友人だと思ってる。だからこそ、そういう関係にはなりたく

ねぇんだよ……」
「ちょっと遊ぶだけじゃないですか。何をそんなに重く考えているんですか？」
軽い笑顔に戻った花沢に霊幻の身体から力が抜ける。
「そ、うか。そうだよな。はは……」
自意識過剰だったか、と霊幻は力無く笑う。女に不自由していないだろう花沢からすれば、霊幻はちょっとした珍味、一晩の箸休めにしか過ぎないのだろう。
気にすることは無かった、とへらりと霊幻は笑う。
「じゃ、メシ食ってホテル行こうか」
「ええ。えーと、コンドーム持ってないんですけど、アレってどこで買えるんでしたっけ」
「あぁ、いいよ。俺が持ってるから。なんだよ、しばらく女の子捕まえられなかったのか？」
「……ええ、まぁ、そんなところです」
花沢は霊幻に揶揄うように言われて曖昧に笑った。
「えーと、メシ何処行く？」
「影山君とよく行ってたラーメン屋があるって言ってたじゃないですか。そこ行きたいです」
「そんな所でいいの？もうハタチなんだし居酒屋もバーも連れてってあげるけど」
「いいえ」
また花沢はほくそ笑んだ。
「そのラーメン屋がいいんです」
あっそう、と不思議に思いながらも、霊幻は行き慣れた道に花沢を連れて歩き出した。
茂夫と、歩き慣れた道を。

※

「あれ、エクボ、相談所行ってきたの？」
いつもは家でのんびりしている友人が外から帰ってきたのを見て、茂夫は思わずそう尋ねた。

自由に見える友人の行動範囲は意外と狭い。最近は茂夫の家か、相談所か、茂夫や律に気まぐれについていくかだ。
「ん、まぁな。どれだけ困ってるか不可視モードで拝みにいってやろうと思ってな。だけどよ……」
歯切れが悪い。茂夫は黙って続きを促す。
「花沢が手伝いに来ててな。何とか回ってるみたいだ」
「へ……え。じゃあもう僕が行かなくても大丈夫じゃないか」
「そうかもな」
自分で言っておきながら、エクボの同意に動揺する茂夫がいた。
まだ茂夫は覚悟ができていなかったのだ。相談所という居場所を、霊幻という存在を、完全に失う覚悟が。
「……茂夫の机は花沢が使う事になるみたいだ。これで気にせず霊幻を忘れられるぜ。良かったな」
「……！」
猛烈な嫉妬が茂夫の胸を焦がす。
その場所は。霊幻の『弟子』としての場所は、揺らがないものだと思い込んでいた。
だが。
それが奪われようとしている。
「……明日から、相談所に顔を出すよ」
「奇遇だな。俺様もそうしようと思ってた所だ。……やられっぱなしは性に合わねえ」
茂夫はスマホを手に取り、芹沢にも連絡を取る。現状を伝えると、一度集まって話そうと言う事になった。
とんでもないレベルの超能力者２人が本気になったのをみて、ニヤニヤとエクボは笑う。

「さあ、どうしてやろうか、霊幻──？」

※

ホテルに入ると花沢はキョロキョロしていた。
「あんまりラブホ来たことねぇの？」

「ええ、まぁ……」
いつもは自分の部屋に連れ込んでると言うことだろう、と霊幻は納得する。頻繁に遊ぶなら、学生である花沢にはラブホ代はキツいだろう、と。
「じゃあ、シャワー浴びて……う、おっ！？」
ぐいっと超能力まで使って引き寄せられて、花沢の腕の中に閉じ込められる。
「……ちゅーする？」
「……いえ、しばらくこのままで」
キツく抱きしめられて、霊幻はそろりそろりと花沢を抱きしめ返す。
「結構雰囲気大事にすんのな。遊んでるから、サッと入れてサッと出して終わりかと思ってた」
「……一晩は、今だけは恋人ですから」
「へーえ、ロマンチックだなあ。女の子ならイチコロだろ」
くすくすと笑う霊幻から見えないように顔を肩口に埋めて、切なげに花沢は自嘲の笑みを浮かべた。
「ちょっと準備してくるからさ、離してもらってもいい？」
「準備？」
「そ。男はちょーっと手間かかんの。もし男にハマったら、アナル洗浄は欠かすなよ？ほぐすのもな！」
今日は俺が全部やっとくけど、と言いながら霊幻はトイレに消えていく。
慌てて花沢は洗面台に向かって、身だしなみをチェックし始めた。備え付けの使い捨て歯ブラシで歯を磨き、これまた使い捨てのカミソリで髭を剃る。
「痛っ」
慣れないカミソリで少し顎を切ってしまった。
「……何してんの？」
血が滲む花沢を心配そうに霊幻が覗き込む。
「いや、髭を剃ろうと思って……」
「そんなの気にしねーのに……ま、俺も剃るけどな」
霊幻は鞄からシェーバーを出して手慣れた様子で髭を剃って、洗面

台を掃除した。
「フェラする時さぁ、刺さっちゃうんだよなぁ」
霊幻が欲を滲ませて目を細めて、思わず花沢は目を逸らす。
「しっ、し、シャワー、先に浴びますね！」
「えー、一緒に入ろうよ」
「こっ、心の準備させてください！」
「真正童貞みたいなこと言うなぁ……分かった、分かったよ」
霊幻は部屋に戻ってベッドに腰掛けて携帯をいじり始めた。
ホッと息をついて花沢は風呂場に消えた。
花沢が出てくると、霊幻はもうスーツを脱いでバスローブ一枚になっていた。
「あ、もう風呂入っていい？」
「は、はい、どうぞ」
ドクドクと跳ね上がる心臓を押さえて、花沢は落ち着こうとテレビをつける。
『あっ、あんっ♡やだぁっ♡』
ＡＶが流れていて、ぎょっとしてしまった。
「……一回抜いといた方がいいかな」
花沢は期待しすぎてカウパーをダラダラ流してる自身を軽くしごく。
……ＡＶの喘ぎ声が演技臭くて、集中できない。イマイチ好みのＡＶでは無かった。
（それなら……）
さっき抱きしめた、霊幻の香り。
相談所で必死で奪った、唇の柔らかさ。
それを思い出した方が、よっぽどオカズになった。
「はぁっ……れいげんさ」
「え、一回抜いてんの？」
花沢は声をかけられて思わず出てしまった。
「わ、もったいねえ」
「あ、え、その」
余裕の無さがバレてしまっただろうか、と花沢は焦る。
「ＡＶこれが好きなの？流しながらやる？」

「……いえ、イマイチだなって思ってたので」
だが霊幻が気にしたそぶりは無い。花沢はホッとしながら、テレビを消した。
「テルくんどの体位が好き？」
「えっ！？……霊幻さんのおススメで」
「なんだよソレ。ラーメン屋じゃあるまいし……そうだなぁ、ノンケならバックがおすすめかなー」
笑いながら霊幻が言う。
「顔もちんこも見えないし、喘ぎ声も枕で抑えられるし。萎えにくいと思うぜ」
「えと、……じゃあそれで」
モヤっとしながらも花沢は頷く。
「おっけー」
霊幻はバスローブを脱いでベッドに上がった。
「はい、サイズこれでいいよな？」
「え、あ、はい」
花沢はもたもたと受け取ったゴムに手こずってしまう。
「案外不器用なのな」
笑いながら霊幻がつけてくれた。
「オンナノコとは位置が違うから、気を付けろよ。ココ、な？」
霊幻は四つん這いになって尻を広げる。
「わぁ……」
指でくぱぁと広げられた縦割れアナルに、花沢は目が釘付けになった。
「じゃ、挿れていいよ」
霊幻は肩をベッドに落として、顔を枕に埋める。
花沢はそろりそろりと……指を挿れた。
「う！？」
「凄い……熱くてグチュグチュしてる」
花沢は夢中でローションが仕込まれたアナルをいじる。
「う、ん、んっ、ん……っ」
敏感な内部を探られて、霊幻が枕を噛んで眉をひそめる。
「何だろう……ザラザラしてたり、でこぼこしてる」

興味深げにナカをいじる指が、何度も前立腺や膀胱など性感帯を刺激する。
「〰〰〰〰っ！」
無遠慮な指の動きに耐えられず、霊幻はタラタラと射精した。
「すごい、中がビクンビクンしてる……」
「〰〰っ、あのさあ！？何度もメスイキすると辛いから、もう挿れてくれる！？チンポの方な！！」
「あっ、す、すみません」
慌てて花沢は性器をあてがう。
「ん゛っ！」
一気に突き入れられて、霊幻は鈍い痛みに眉を寄せた。
「うわっ……すごい……すごいな、これ……」
はぁはぁと息を荒げながら、花沢は夢中で腰を振る。
「ん゛っ、ん゛、ん゛ん゛っ」
ゴリゴリと前立腺を亀頭で削られて、霊幻はまつ毛を震わせて枕を掴む。
「あっ、霊幻さん、イきますっ」
──もう？
と思ったが霊幻はその宣言に合わせて締め付けてやる。
若いって凄いなあ、と思いながら。
「はぁっ、はぁ……すごかったです……」
「ん、良かったな。男も悪くないだろ？」
「は？」
「ん？」
枕から顔を上げた霊幻と花沢はしばし見つめ合う。
「あ、ああ、そうですね」
「な」
ニコ、と何処か営業スマイルみたいな笑顔を霊幻は浮かべた。
「じゃあ先シャワー浴びてくる？」
「え？」
「は？」
新しいコンドームをいそいそと出していた花沢と、帰り支度をしようとしていた霊幻がすれ違う。

「え、２回戦やんの？」
「え、駄目ですか？」
「いやいいけど……元気だねぇ」
霊幻は苦笑しながら「遊んでるやつは一回で終わるのがほとんどだからさぁ」と元の姿勢に戻ろうとして、腕をぐいっと花沢に引かれた。
「次は正常位がいいです」
「えぇ……俺、結構喘ぎ声出ちゃう方なんだけど」
「たぶん萎えないんで」
「無理そうだったら目ぇつぶれよ。俺も手で口塞ぐから」
花沢は頷いて、仰向けになった霊幻の身体を眺める。
「背中も真っ白で綺麗でしたけど、やっぱり顔見てやれる方がいいですね」
「……テルくん男も結構いける口なのね」
また苦笑する霊幻に花沢は口付ける。
「綺麗だな……」
花沢の唇が首、胸、腹と落とされる。
「くすぐってぇよ」
くふくふ笑う顔に、花沢は切なくなる。
「……挿れますね」
「んー」
ぐいと足を持ち上げて、花沢は今度はゆっくりと挿れていく。
「あ、ああっ」
熱いクサビが打ち込まれていく感覚に、霊幻は枕を掴んでやり過ごす。
「ここ、気持ちいいですか？」
「うんっ……だから、あんまりこすらないで……っん！？」
霊幻の弱点を、花沢は狙ってピストンした。
「ぃやっ……先、イっちゃう、からぁ……っ、あ……っ！」
霊幻は口を押さえて、ガクガクと痙攣した。
「……っ！……っ！」
目の端に涙を浮かべて快感を耐える霊幻を、自らもうねる内部に絶頂に追い詰められながも、花沢はうっとりと眺める。

「おっ、まえ、なぁ……！」
息を整えた霊幻が涙目で花沢を睨む。
「次はイく時の声聞かせてくださいね」
「……は！？」
ちゅ、と霊幻の指先に口付けながら、花沢はうっそりと微笑った。

※

「ねちっこい。しつこい。腰イテェ」
ぶつぶつと文句を言う霊幻をにこにこと花沢は眺めながら、彼の髪を撫でている。
「次、」
「！」
花沢の顔が喜びにほころぶ。
「女の子とやる時には、こんなことするなよ」
が、その顔はしゅんと悲しそうなものにしおれてしまった。
「じゃあ、俺は寝るから。もう帰っていいぞ。イテテ……」
「え！？」
花沢は驚いて霊幻を見てしまう。
「は？もう用はねーだろ」
「……」
そう言う霊幻をしばらく眺めていると、疲れたのかすうすうと寝息をたてはじめた。
「霊幻さん？」
花沢が話しかけても返事は無い。
ベッドに潜り込んでぎゅっと抱き寄せて。
「好きです……」
花沢はポロリと涙を一粒こぼした。

「「「「やっぱり諦められない」」」」

続